

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-310	12-022	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)		
20/20-alcohol and age-related macular degeneration: the Melbourne Collaborative Cohort Study アルコールと加齢黄斑変性について: the Melbourne Collaborative Cohort Study		
執筆者		
Adams MK, Chong EW, Williamson E, Aung KZ, Makeyeva GA, Giles GG, English DR, Hopper J, Guymer RH, Baird PN, Robman LD, Simpson JA		
掲載誌		
Am J Epidemiol. 2012 Aug 15;176(4):289-98.		
キーワード		
加齢、飲酒、加齢黄斑変性、MCCS		
要 旨		
<p>目的： 加齢黄斑変性と飲酒量、飲酒様式、アルコールの種類に関する研究は少なく、その関係を明らかにする。</p> <p>方法： 加齢黄斑変性の有症者の割合と飲酒の関係を20,963名の対象者を有するthe Melbourne Collaborative Cohort Study (大多数が1990-1994のベースライン時の年齢が40-69)を用いて調査した。対象者にベースライン時に構造化面接を行い、飲酒形態を決定した。2003-2007年の追跡期間に両眼の眼底検査を行い、初期・後期加齢黄斑変性を評価した。</p> <p>結果： 性、年齢、喫煙、出生国、教育歴、身体活動、エネルギー摂取量を調整し、ベースライン時に非飲酒者であった者に比べ、20g/日以上飲酒者は初期加齢黄斑変性のオッズ比が約20%高かった (OR=1.21, 95%CI 1.06-1.38, P=0.004)。この正の相関はワイン、ビール、スピリッツで明らかであった。この結果は男女で差がなかった。20g/日以上飲酒者の後期加齢黄斑変性のオッズ比は1.44 (95%CI 0.85-2.45, P=0.17)であった。</p> <p>結論： これらの結果から、飲酒が加齢黄斑変性の危険因子であることが示唆された。</p>		